

## ブックカフェ（読書会）をつくる

～学校図書館と国語科授業の「二つの読書会」における挑戦とその課題～

Make a book club

- Challenges and their issues in “Two book clubs” of school library and Japanese language Lessons -

国語科 渡邊 光輝 学校司書 奥山 文子

### 要 旨

本稿では、中学校で行われた学校図書館と国語科の二つの読書会の立ち上げと、その運営に関する実践を記録する。読書会は国語教育、また学校図書館が行う読書指導の方法として主要な取り組みの一つである。それにも関わらず、実践上は、課題本の選択や読書会での話題の設定、教師や学校司書の支援のあり方など検討すべき事項は多岐にわたり、日常的に取り組むことが難しい現状がある。本稿では、新たに中学校で取り組みをはじめた学校図書館、国語科における読書会の実践を詳細に記述することを通して、それらの検討事項や課題、成果について考察をし、学校図書館、国語教育における読書指導の連携の方策を模索した。

キーワード：読書指導 読書会 集団読書 読む方略 国語科 学校図書館

### I はじめに

本稿では、中学校で行われた「二つの読書会」の実践を取り上げる。一つは学校図書館で行う学校司書によるもの、もう一つは国語科教員が授業で行ったものである。筆者である二人は、学校図書館では2015年から、国語科授業では2017年に、本格的に読書会の取り組みをスタートさせた。その取り組みの試行錯誤を記録としてここに残す。なお、本稿での読書会は、堀（2001）の「同じ本をみんなで見よ」<sup>1</sup>という「集団読書」の活動を想定している。

学校図書館の取り組みの中で、読書会は学校図書館法第4条の「学校図書館の運営」の一つとして位置づけられている。また国語科では、現行の学習指導要領の「読むこと」指導の中に「詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流する」という文言があり、読書会と関連がみられる言語活動が例示されている。このように、学校図書館、国語教育において、読書会は重要な読書指導の方法の一つであるといえる。

しかし、教科書、教材などが整備されている授業と異なり、課題本を一から準備したり、目的や実態に応じて交流の形態を考えたりと、読書会を行うためにはさまざまに検討すべきことが存在する。そこで、本稿では、中学校で学校図書館と国語科授業が読書会に取り組む際に、それぞれどのような準備をし、実践したかを明らかにしていくことをまず目的とする。そして、このように「二つの読書会」を並べて取り上げることで、学校図書館と国語科のそれぞれの読書指導の方法論や目指す方向性の違いについても考えていく。そして、両者の共通点や差異から、学校図書館と国語科授業の読書指導連携の方策を見いだしていきたい。

なお、IIの学校図書館の実践は学校司書の奥山（第二著者）が、IIIの国語科授業の実践は国語科教

論の渡邊（第一著者）がそれぞれ分担して執筆をしたことを付記しておく。

## Ⅱ 学校図書館における読書会の実践

本節では、学校司書である第二著者（奥山、以下略）が2015年に本校で初めて読書会に取り組んだ経緯と、その後の読書会の取り組み、それらを通して見えてきた課題について述べる。

### 1 読書会をはじめた動機

第二著者は、2015年度から、図書委員会のイベントとしてブックカフェ（読書会）を実施してきた。はじめたきっかけは、夏休み前に全校生徒に配布したリーフレット「夏読」に、『海の島』（アニカ・トール著 菱木晃子訳 新宿書房 2006）を載せたことだった。その後、読書好きな生徒の間でその本が読まれた。約300ページの厚い本にも関わらず1冊目を読んだ後、続編の3冊に手を伸ばす生徒が多く、すっかり愛読している様子が見られた。筆者は、以前からこの本について中学生と語り合いたいと考えていた。生徒の読後の感想にも手ごたえを感じたので、いっそ、この本を読んだ生徒が一堂に会し、感動を語り合ったら面白いのではないかと思い、放課後読書会を企画した。ちょうど、秋の読書週間を控えていた頃だったので、2015年の秋の読書週間のイベントの一つとして実施することとした。実施にあたって読書会の名称を「ブックカフェ」と名付けた。飲み物を提供するわけではないが、まるでカフェで過ごすように、くつろいで本についてワイワイ話してほしいと願ったからである。

### 2 読書会の準備

#### (1) 読書会のねらいについて

ブックカフェのねらいは、読書の喜びを共有することである。本校の生徒は、読書好きの生徒が一定数いる。本校の貸出状況から2割くらいの生徒が、読書を習慣にしている、読書が好きなのではないかと想像される。その生徒たちが、ブックカフェで読書の喜びを共有することで、さらに深い読書を経験できて、周囲に読書の輪が広がっていくのではないかと考えた。何事も楽しいことでないで広がっていくのは難しい。

筆者は、カウンターで日常的に本を返却した生徒となるべく本について話すようにしている。生徒は思春期の難しい年代なので、もちろん嫌がられない程度でだが……。そうすると、「3冊の中でこの本が一番面白かった」「こういう本が他にないか」など気軽に会話ができるようになる。そうした会話を通じて本の好みを知ることになり、生徒の好みに合った本を薦めることができるようになる。調べ学習や自主研究で資料を探す生徒に、探し求めている資料を提供することと、自分を育てる読書のための本を提供することは、どちらも重要な司書の責務であると考えている。

中学生が好む本は、軽いテーマのことが多いのが現状である。ブックカフェが広がれば、気軽に手に取られないような本でも、ブックカフェがあるから読んでみたい、という読書喚起になることを期待している。本にはただ、娯楽だけでない大きな力がある。内面を磨き、心の成長を促す本を大勢の生徒へ手渡したいと考えている。

#### (2) 読書会の本の選定

これは、読書会のねらいと大きく関わってくることであり、筆者が生徒に手渡したい本を選んでいく。その中でもブックカフェでは、テーマのはっきりとした本、読書の醍醐味を感じられる本、複数の人と感想を共有することで、さらに読みが深まるような本を選ぶことにしている。また、中学生と同じくらいの年齢の主人公が、精神的に大きく成長する姿を描いた本も取り上げている。ただ、第2回目の『舟を編む』の主人公は大人である。『舟を編む』は、その直前に2年生の定期試験の読書課

題本だったので選んだ。第1回の参加者は1年生だけだったので、2年生の参加を促すために2年生全員が読んだ本にしたのである。

### (3) 読書会の進め方

#### 【当日まで】

#### ①日程を決める

学校行事予定をよく調査し、放課後に生徒が参加しやすい日を選んでいる。2015年度は学校行事と放課後の生徒の行動の予測がつかず、ブックカフェの日程は決めたものの、合唱コンクールの練習のために参加予定の5人の生徒が直前にキャンセルしてしまったことがあった。時間は、清掃が終わった15時50分から16時30分までの40分間にしている。ブックカフェが終わってから、部活動に急いで向かう生徒もいる。

#### ②課題本の告知

2か月くらい前に、図書委員会だよりやポスター（あらすじ付き）で告知した。また、カウンターにも本を置いて宣伝した。

#### ③参加を募る

第1回のブックカフェは、読者が10人くらいいたので読んだ生徒を誘ってみた。2回目以降は、図書館の常連に課題本をすすめて、「時間があったらブックカフェに参加してみませんか」とソフトに誘っている。

#### 【当日】

#### 会場設営と準備するもの

会場は図書館の一角で、閲覧機を一つ使っている。課題本を人数分、ミニホワイトボード、ボイスレコーダー、アンケート用紙、ぬいぐるみ（ぬいぐるみを持った人が発言する）を用意している。（図1）課題本は、公共図書館に複数冊所蔵していれば、団体貸出で借りている。『海の島』は当時文京区で所蔵がなく、近隣の公共図書館をいくつも回って個人で借りて集めるという苦労があった。

司会は、司書が担当している。そのため、事前に本を良く読みこんで、話し合うテーマをいくつか選んでいる。参加したメンバーから、話し合いたいテーマを出してもらうこともある。

#### 【読書会の実際】

第1回『海の島』のブックカフェでは、まず、時代背景、あらすじ、登場人物を確認したあと、一番好きな登場人物、疑問に思った点、ステフィ（主人公）は変化（成長）したかについて話し合った。読書会は初めて体験した生徒ばかりだったが、読んで感じたことを、気負いなく生き生きと話してくれた。自分の体験と重ねて読んだ生徒もいた。筆者が思いもつかなかった観点で読んでいた生徒もいて、驚いた。ブックカフェ終了後のアンケートには、「他の人と同じところに共感して、でも違う意見もあって、すごく面白かった」「自分が感じたことを周りが受け入れてくれるところが、とても楽しかった」「読みが深まった、また読書会をやってみたい」とあり、

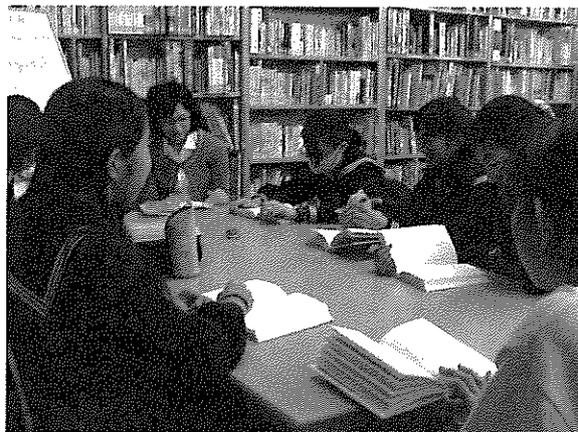


図1 学校図書館主催の読書会の様子

全員の生徒がまたブックカフェに参加したいと記していた。次のブックカフェの本を推薦する生徒もいて、読書の喜びを共有することに手ごたえを感じた。

#### 4 読書会のその後

その後、第一著者の後押しがあり、ブックカフェを継続して行うことになった。2015年度中は1か月おきに実施したが、本を読む期間が必要なので、1か月ごとに行うのは難しく、2016年度からは、4カ月に1回の間隔で1年に3回実施することにした。いままで開催したブックカフェの一覧は以下の表のとおりである。(表1)

表1 今までに開催したブックカフェ

	時期	読んだ本	参加人数
1	2015年11月	『海の島』 アニカ・トール 菱木晃子訳 新宿書房 2006	7人
2	2016年1月	『舟を編む』 三浦しをん 光文社 2011	3人
3	2016年3月	『クラブアート』 オトフリート・プロイスラー 中村浩三訳 偕成社 1980	3人
4	2016年6月	『ギヴァー 記憶を注ぐ者』 ロイス・ローリー 島津やよい訳 新評論 2010	7人
5	2016年11月	『鬼の橋』 伊藤遊 福音館書店 1998	2人
6	2017年3月	『時をさまようタック』 ナタリー・バビット 小野和子訳 評論社 1989	6人

ブックカフェの後も、ブックカフェに参加した生徒が周囲に薦めて、『海の島』は多くの生徒に読まれた。もともと、この本を複本で所蔵していたこともあり、『海の島』が2015年度のベストリーダー(一番借りられた本)になったのは、嬉しい結果だった。

また、2017年2月には、図書委員会主催の生徒だけ(司会も図書委員)のブックカフェがあった。読書週間で全校生徒に好きな作家、好きな本などのアンケートをとったのだが、その結果を踏まえて「好きな作家第1位」の有川浩の著書である「好きな本第2位」の有川浩(2006)『図書館戦争』(メディアワークス)でブックカフェをすることになった。司書(第二筆者)は、支援にまわり本を参加人数分用意した。参加者は、司会の図書委員も入れて9人と多く盛り上がった。しかし、映画にも漫画にもなった人気の物語なので、感想がほとんど同じであるという点に限界を感じた。

#### 5 学校図書館が主催する読書会の課題

課題と感じていることは三点ある。一つは、ブックカフェを放課後行っているのだから、自由参加となり、参加者が思うように増えないことだ。よく読まれている本を課題本に選定(『海の島』・『ギヴァー』)すれば、参加者は多いのだが、あまり読まれていない本を課題本にした場合は、参加申込は少ない。というのは、課題本を読んでもらうところから始めなければならないからだ。ただ、『鬼の橋』でブックカフェを実施した際に、2人の参加者に、参加人数が少ないことについてどう思うか聞いたところ、「参加者が少なくていいじゃない。このブックカフェは安心して本のことを話せる場だ。」と2人とも全く気にしていなかった。本の内容を深く読み取り、それぞれの意見を尊重して聞き、そうした読みかたもあったのかと触発されることで満足して帰る。人数にこだわらず、こうした読書会の本質を忘れないで継続していきたい。

また、二点目として、本の用意が難しいことが課題である。ブックカフェ当日、図書館内で使う本は、公共図書館の団体貸出で用意できるが、その本を、個人に貸し出すことができないという規定が

あるため、生徒が家に持ち帰って読むことはできない。そのためブックカフェの前に、複本で用意できないため大勢に課題本を読んでもらうことができないのだ。この問題は、参加者を増やすことに大きく関わっている。

三点目として、学校行事の合間を縫って、日程を決めることに難しさを感じている。生徒も部活動との兼ね合いが難しいようだ。昼休みなら参加できるという生徒もいるが、時間が足りないように感じて放課後に実施している。課題本を読んでブックカフェに参加したいと言っていた生徒が、様々な用事ができてキャンセルすることが多々ある。

ねらいでも明らかなように、放課後のブックカフェは全校生徒や、学年全体の生徒、学級単位、図書委員全員というような単位の生徒を対象としていない。ターゲットは読書が好きな生徒である。読むことに苦手意識を持った生徒を巻き込んだの全員の読書会ではないことは、授業で行う読書会と大きく違う点である。

### Ⅲ 国語科授業における読書会の実践

本節では、国語科教諭の第一筆者（渡邊、以下略）が2017年に取り組んだ読書会の実践と、実践を通して見えてきた課題について述べる。Ⅱで先行して実施した学校図書館の読書会を踏まえて、一学年全生徒を対象とした国語科の読書会を次のように実践した。両者の比較を通して、中学校の教育課程を通して取り組む読書会の全体像を検討していきたい。

#### 1 読書会をはじめた動機

国語科教諭である第一筆者は、2016年度は1年生を担当した。この学年では入学当初より次のような読書活動を積み重ねてきた。

- 『読書生活デザインノート』（読書記録）を用いて読書の軌跡を記録する。
- 毎時間冒頭の10分をあてて自由読書の時間を設定。
- 長期休業中（夏・冬）の課題としてオススメ本のPOP作りをして掲示する。
- 長期休業明けの授業で「ビブリオバトル」（読書紹介）を行う。（2回）
- 学校司書による授業と関連したブックトークを行う。

このような継続的な取り組みによって読書時間を確保するとともに、本とふれあう機会を意図的に作ってきた。読書会の取り組みは、このような一年間を送ってきた学習者が、後期にその集大成として取り組む読書活動として設定した。

#### 2 読書会の準備

##### (1) 読書会のねらいについて

本単元の読書会は、これまで生徒が経験してきた読書活動と次の点で異なる。

- 自分が選んだ好きな本を読むのではなく、学校が指定した本（課題本）を読む。
- 本を一人で読むのではなく、読んだ後に他者と感想を交流する機会が設定されている。
- 国語の授業として行うので、単にその本の内容を読んで楽しむだけでなく、「本の読み方」についても学ぶことが期待されている。

読書会の取り組みは以上のような点で、これまで授業で取り組んできた読書とは異なる。この読書会では単元の目標として「小説を味わう様々な方法を身につけ、それを自覚的に活用する。」と生徒に提示した。それ以外にも、私はこの読書会で次のことを期待した。一つは、今まで手に取らなかった本に手を伸ばし、その魅力に気づくことができること、もう一つは、共通の本を読むことで、気心

の知れ合ったクラスメートとの新たな一面を知ること、さらには、一冊の本を、感性や価値観の違う読者と共に味わうことで、様々な角度で文学テクストを読むことの価値に気づくことである。

### (2) 読書会の本の選定

課題本の選択は、司書（第二筆者）と相談の上、次の要件を満たすものにした。一つは読書が苦手な生徒も、得意な生徒でも読める本を、また、生徒の読書の好みを生かすために、なるべく数多くのタイトルをそろえること、翻訳物やファンタジーなどいろいろなジャンルを入れること、登場人物の年齢が近く、主人公が男、女に偏らないこと、さらには、この実践以降も来年度も引き続き読書会で使えるように、二、三年生でも読むに耐える本などである。これらを勘案し、課題本のタイトルと冊数（生徒の希望状況を見越した冊数）を設定し、授業開始の一ヶ月前に手元に届くように発注、購入した。（実際には発注する際の書店の在庫状況なども考慮した。）用意した冊数よりも生徒の希望が上回った場合は、公共図書館等でかき集め、それでも足りない場合は抽選とした。（表2）

表2 課題本の準備および選択した生徒

タイトル	選んだ生徒 (用意した数)	タイトル	選んだ生徒 (用意した数)
モモ	16人 (20)	ハッピーノート	9人 (10)
ほくらのサイターの夏	14人 (20)	変身	2人 (10)
西の魔女が死んだ	7人 (20)	星の王子さま	7人 (10)
夏の庭	10人 (20)	おれのおばさん	3人 (5)
エイジ	13人 (11)	穴	6人 (5)
いちご同盟	7人 (15)	アルジャーノンに 花束を	8人 (5)
カラフル	16人 (19)		

### (3) 読書会の進め方

#### ①授業の計画

本単元では、自分たちが選んだ課題本の読書会を行う前に、教科書教材を読書会の形式で交流する活動を前段に位置づけた。教科書教材の交流で読書会のだいたいの流れをつかみ、それを課題本の読書会の交流に生かせるように配慮した。以下表3が計画表である。1～10は授業時数を示す。

表3 読書会授業計画

1	単元の概要と課題本について知る。	【課題本お試し読書期間開始】
2	教科書教材「少年の日の思い出」を読む。読書会で話したい疑問やテーマを書き出す。	↓
3・4	教科書教材「少年の日の思い出」ミニ読書会1・2	
5・6	課題本を読む	
	ここで、入試期間のため一週間の自宅学習期間となる。その間、各自本を読んでおく。	
7	読書会の準備（疑問点・テーマを考える）	【読書会メンバー確定】
8・9	読書会を行う	
10	読書会の内容をまとめる	

②グループ分け

クラス内で同じ本を選んだ人同士でグループを作る形にした。最初の授業で課題本のリストを配布し、司書（第二筆者）がすべての本について簡単な説明をした。その後、読書会の直前まで【お試し読書期間】として本を選ぶ時間とした。グループには特に人数の上限は設けなかったが、最低でも二人以上集まればグループ結成、一人しか選ばれなかった場合は他の人をグループに呼ぶか、他の本を選んでもらうようにした。選択する課題本の種類が多かったため、希望が分散し、多いところは6人、少ないところは1人という状態になり、調整して2人グループとなった。

③読書会の事前の指導

A 「文学を味わう方法7+a」

本を読むプロセスの支援として、小説を読む方略を意識させる「文学を味わう方法7+a」<sup>ii</sup>を提示し、常にこれを意識して取り組ませるようにした。(図2)「文学を味わう方法7+a」の7つの項目はエリン・オリバー・キーン(2014)、吉田新一郎(2010)でとりあげられている「優れた読み手が使っている方法」を下敷きにし、それと興水実(1975)の「文学鑑賞スキル」を参考にして筆者が作成した。

生徒に提示した文学を味わう方法は次の通りである。

- |            |
|------------|
| 1 結びつける    |
| 2 イメージする   |
| 3 感情移入する   |
| 4 疑問を持つ    |
| 5 意図を考える   |
| 6 重点をつかむ   |
| 7 世間や人生を思う |

なお、この7つですべての読みの方略を網羅したということではない。「7+a」としたのは、残りの方略は授業を通して自分で見つけていくように促すためである。

これをカードに印刷し、しおりにした。生徒はつねにこの方略を意識して課題本を読み進めていくようにさせた。

B 引っかけりや疑問を可視化する付箋の活用

全生徒に見出し用のミニ付箋(4色)を配布した。読み進めながら読書会のテーマになりそうなところや疑問に感じたところにどンドン付箋を貼るようにした。

C 一枚ポートフォリオ

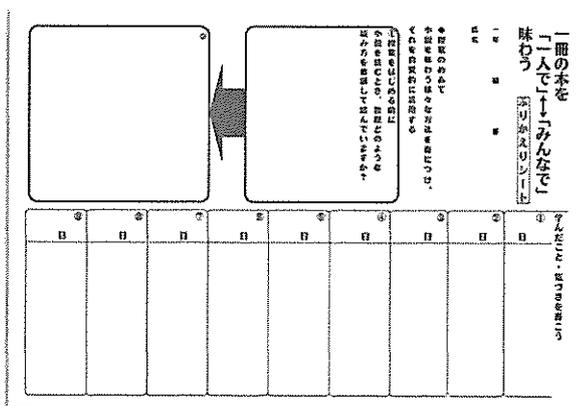


図3 一枚ポートフォリオ

1【結びつける】 自分の経験や知っていることと作品を関連づける。	2【イメージする】 様子を頭の中で映像化(イメージ)して読む。
3【感情移入する】 登場人物に感情移入して(なりきって)読む。	4【疑問を持つ】 「なぜ?」とか「何だ?」と疑問を持つ。
5【意図を考える】 言葉や、作品全体が何を言いたいのか深読みする。	6【重点をつかむ】 何が大切なのか、ポイントを考える。
7【世間や人生を思う】 世の中や人間の生き方について考えをめぐらす。	⑧
⑨	⑩

図2 文学を味わう方法7+a

この授業期間内で課題本を読むときに意識した読む方、味わい方を「一枚ポートフォリオ」<sup>iii</sup>の形で捉えられるようにした。(図3)

上段の大きな枠は、小説を読むときにどのような読み方をしているかという読む方略を授業前と授業後で記述させた。下段は毎時間ごとの振り返り※を書く枠である。ここでは、本を読んだときにどこに一番没頭したかという「今日のはまり」を言葉にするようにアドバイスした。「今日のはま

り」を言葉にすることは、読書時間の中で一番、作品と自分が深く関与したのはどこか、それはどのようなアプローチ（読みの方略）によって達成することができたかを捉えるためである。「はまり」の感覚から逆算して、自分の読み方の傾向を省察するようにした。

※ある生徒のポートフォリオに書かれた「今日のふりかえり」（『西の魔女が死んだ』）

<p>1 感情を入れたり深読みできそうなところを探しながら、気持ちを意識して読んだ。</p>	<p>2 書いていないことを悟って読み進めているのが難しかった。離れているところにこたえがあると、探すのも大変だった。</p>	<p>3 名前や呼び名に気を取られずに、この人はこの人なのでは？と考える。なぜこうしたのか、行ったのか、と。「なぜ」で考えてみる。</p>	<p>4 「西の魔女が死んだ」母がおばあちゃん家から家に帰ってしまいう時の寂しさと、自分の時と照らし合わせて、寂しさを本と分かち合っていた！→入院していた時の。</p>	<p>5 おばあちゃんの話聞いてると、まいが、「それで、それで？」というのですが、私も思わず心の中で、それで、それで？と言ってしまっていました。物語でまいになった気分でした。（ずっと）</p>
--	---	---	--	--

D 読書会に向けての疑問・テーマ作り

事前に疑問点や話したいテーマを書き出させておくことにした。付箋に書き出したものは掲示ボードに貼り、他のクラスから出た疑問やテーマを参照することもできるようにした。

E 読書会を振り返りつつ、他のクラスにその様子を伝える「置き手紙」

司書より「モモ」のおすすめテーマ

①本を読んで、あなたの時間に対する考えは変わりましたか。

②P141「人生で大事なことはひとつしかない」・・・のあたりについてどう思いますか。

③モモのキャラクターについてどう思いますか？なぜモモのような人を主人公にしたと思いますか？

お茶中ブックカフェ  
(所)組からの置き手紙

名前 \_\_\_\_\_ 上

私たちの読書会の様子はこんな感じでした！  
(読書会の流れ、盛り上がったオススメテーマなど)

灰色の男たちの正体について  
・灰色、とは何か、なぜ？ } 流れ  
・何で男なのか }  
・灰色の男たちのイメージ

話し合いの進め方のアドバイス  
(話し合いは自分たちから行くか or うまくいかない) ありえないテーマだ、何から話していいかわからない、間違っている事から次々テーマを決める。

読書会では各テーブルに「置き手紙」を用意した。この「置き手紙」には、司書が考えた読書会のヒントカードと他クラスのメンバーが書いたふり返りが同封されている。前の時間に取り組んだクラスが特に盛り上がったテーマ、よい読書会の話し合いのアドバイスなどを書いたものである。こうして、読書会の様子をリフレクションし、他のクラスにもテーマ選びなどの参考になるようにさせた。

図4 置き手紙（左は学校司書が作成。右は生徒が書いたもの）

(4) 読書会の実際

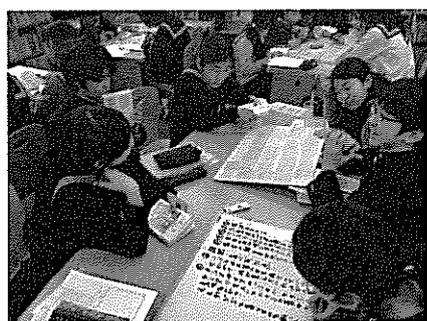


図5 国語授業での読書会の様子

読書会は2時間行われた。同じ本を選択したメンバーでグループを組み、自分たちや他のグループが設定したテーマを元に話し合いを進めていく。(図5) ホワイトボードを活用し、交流がかみ合わないものにならないように留意させた。(図6) 一回目の交流が終わったあと、そのふり返りを「置き手紙」の形で書き残し、他クラスに読書会の様子を伝えた。

読書会は盛り上がり、活発に交流できたグループは多く、おおむねねらいに沿った読書会が行われていたが、次のような問題も感じられた。

### ①グループ編成の問題

この読書会では、同じ課題本を選んだメンバーでグループを編成した。その課題本の選択肢もとても多かった。そのことでグループの人数や読む力に偏りが生まれた。4人程度の少人数で、かつ文学作品に読み慣れている生徒のグループでは非常に話し合いが深まったが、反面、大人数で、かつ文学作品を読んで話し合うことに苦手意識を持っている生徒が集まったグループだと、自分たちで読書会を運営することが難しかったようだ。課題本の選択肢とグループ編成とは密接な関係があるので、読む力が偏らないようなグループを作るためには選択肢を絞り込むなどの配慮が必要であった。

### ②読書会の話題の問題

生徒にとって身近な設定や話題であったときに、読書会の交流は盛り上がっていたが、その話題がどの程度読書会の授業としてのねらいに即していたかという点で難しさを感じた。

例えば、『エイジ』や『ハッピーノート』のような主人公が自分に近い設定の場合、「〇〇に似ている友達がいて……」「うちの親も……」といったように、自分の世界に寄せて対話が進む傾向がみられた。それ自体は、一冊の本から発展させて対話しているという点で読書会といえるかもしれない。しかし、身近な友達の紹介などの話題が中心になってしまう場合、どこまでが作品の解釈につながっていくのかが見極めることが難しかった。

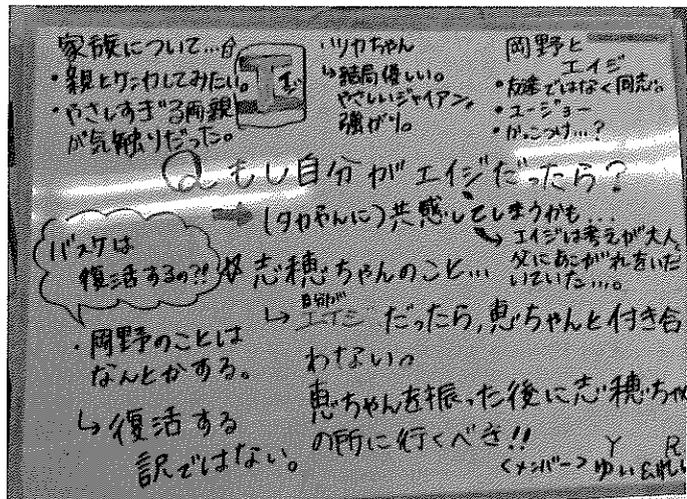


図6 読書会で使用したホワイトボード

もう一つ、読書会の話題として授業者の立場から気になったことがある。それは、作品全体の解釈から考えてそれほど重要とは思えない問いに生徒がこだわり、限られた読書会の時間を使ってしまったという状態である。例えば、『ぼくらのサイターの夏』では「なぜ『サイター』がカタカナなのか?」という問いで話を進めていたグループがあった。授業者としては、枝葉末節の疑問にかかざらわるのではなく、作品の主題などの大きな問いについて、お互いの経験や価値観を交わし合っていて欲しいと思っていたのだが、読書会に臨む学習者の認識とのずれがあったようだ。

反対に、課題本の質に助けられて読書会の交流が深まったものもあった。『モモ』は寓話として作品を貫く大きなメッセージがある。『穴』は縦横に張り巡らされた伏線を読み解いていくのが楽しい。『西の魔女が死んだ』では美しい自然の描写や登場人物のメッセージに生徒たちは惹きつけられていった。このように課題本の質によって、読書会が大きく左右されることをあらためて痛感させられた。

### (5) 読書会の事後の指導

読書会を終えたら、司書（第二筆者）に「続きの本」として関連する本を紹介するブックトークをしてもらった。また、生徒は自分が選んだ本の帯を作ったり、読書会の交流を生かして本のレビューを書いたりするなどの課題に取り組んだ。（制作した帯は図書室内に展示してもらった。）最後に一枚ポートフォリオの記述をふり返り、授業を終えて、どのような読みの方略※に気づいたかを確認した。

※生徒が読書会を終えて「文学を味わう方法7 + α」に書き足した読みの方略（一部）

何回も読み返す・視点を変えて読んでみる・題名や伏線について考える・現実に置き換えて捉える・先を想像しながら読む・話のその後について考える・作品名について考える・作者になりきる

(5) 読書会を終えて、アンケートの分析から

アンケートは、【読書会は楽しかった】・【読書会は本を読む力を付けた】・【課題本は自分に合っていた】について、すべて4件法（1 よくあてはまる・2 ややあてはまる・3 あまりあてはまらない・4 まったくあてはまらない）で実施した。（表4）平均値が「1」に近づくほど肯定的な評価ということになる。

表4 事後アンケートの結果（人数）

	楽しかった	読む力がついた	課題本は合っていた
平均	1.30	1.69	1.69
1 よくあてはまる	79	45	47
2 ややあてはまる	32	58	53
3 あまりあてはまらない	1	8	12
4 まったくあてはまらない	0	1	0
無回答	7	7	7

いずれの項目も、肯定値は高く、このデータを見る限り、読書会は多くの生徒にとっておおむね楽しく力を付けると自覚された取り組みであったことが示唆される。

次のアンケート項目は【読書会の授業の良さとして感じられるところは】という質問である。回答者は上位2つの回答を選択する。次のような結果になった。

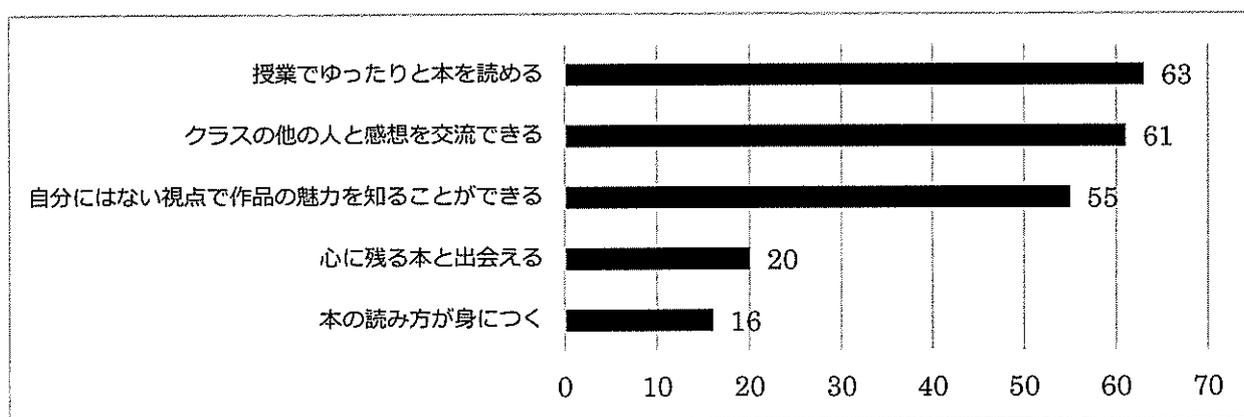


図7 読書会の良さは？（人数）

この結果から、生徒たちは読書会について、ゆったりと本に親しむ時間、そしてその本の感想を交流でき、多様な角度で作品を鑑賞できるところが「良さ」であると認識していることが分かった。

### 3 国語科授業における読書会の課題

読書会の実践で難しさを感じたのは、課題本の選択である。まず最低限、授業に参加する多様な生徒の関心や読む力に応じて課題本を選択しなければならない。その上で、自分たちで読書会の交流が進められるだけの魅力や力のある作品であることや、何種類の課題本を揃えればよいかという検討も必要となる。取り上げる課題本が多ければ、多様な生徒の好みに対応することができるが、一つの本を選ぶメンバーが少人数となれば、教師が読む力に応じてバランスよくメンバーを調整したグループ編成をすることが難しくなる。

次に課題と感ずるのは、読書会で交流するテーマ、疑問の吟味の問題である。どのようなテーマや話題であれば、授業者が意図するような、作品のテーマと多様な読み手の価値観とが絡み合う読書会になるか、また、どのような教師のファシリテートによってそれが可能になるか検討することが必要である。今回はそれを「読書会の事前の指導」の「D 読書会に向けての疑問・テーマ作り」や、Eの「置き手紙」によって支援しようとしたが不十分であった。読みが深まる「読書会」とはどのようなものであるか、具体的なイメージを共有する手立てを検討することが必要である。

## Ⅲ 学校図書館と国語科授業の読書会を実践して見えてきたこと

最後に、これまで述べてきた学校図書館と国語科授業の読書会の実践を比較し、共通点と相違点を考察することを通して読書指導における両者の連携の可能性を考えていきたい。

表5 学校図書館と国語科授業の読書会の比較

	学校図書館で取り組んだ読書会	国語科授業で取り組んだ読書会
目的	読書の喜びを共有し、読書の輪を広げることがねらい。	読むことの学習として行う。 小説を味わう様々な方法を身につけ、それを自覚的に活用することが目標。
参加者	読書が好きな生徒がターゲット。 自発的に集まってきた少数のメンバーで。	授業に参加する全生徒が対象。 読書傾向や読む力もさまざまである。
課題本の選択	「学校司書が生徒に手渡したい本」を規準として課題本を一冊取り上げる。 テーマのはっきりした、読書の醍醐味を感じられる本。複数の人と感想を共有することでさらに読みが深まるような本。	生徒全員の興味関心、読む力にあわせて、幅広く本を選定するように配慮。 複数のジャンル、登場人物などの作品を提示し、その中から生徒に選択させる。
読書会までの指導	二ヶ月前に予告。 参加者は読書会当日までに各自で読んでおく。読んでくること以外の条件はなし。	一ヶ月前に課題本を決定。 授業時間の中に読む時間を設定している。 文学を味わう方略を示し、振り返らせる。
読書会での指導	学校司書の問いかけや促しによるファシリテーションによる進行が中心。	生徒自身で問いを見つけたり、テーマを選択したりして自分たちで交流を進める。

### 1 学校図書館と国語科授業における読書会の差異

表5は学校図書館と国語科授業での読書会を比較したものである。両者の最大の違いは参加者である。国語科授業では読書会に全員が参加するが、学校図書館では興味を持った希望者が参加する。そ

こから、学校図書館では、ある程度学校司書が思い切って課題本を選定することができるし、国語科授業では参加する生徒の多様性に対応した課題本を選ぶこととなる。

もう一つの違いは両者が目的とするところの差異である。学校図書館では「読書の喜び」を共有することが全面に出されるが、国語科授業では「読むこと」指導の延長線上として実施される。そのため、国語科授業では読むプロセスそのものについても、方略を示したり、読む観点やテーマを学習者自身が持つことができるように指導したり、事後のふり返りを促したりといった指導・支援が行われる。このような、読書会当日だけでなく、読むプロセスそのものへの介入が行われるのが国語科における読書会指導の最大の特徴である。

## 2 学校図書館と国語科授業における読書会の共通点と連携の可能性

学校図書館と国語科授業では、目的や参加者などに違いがみられるものの、両者には共通点もみられる。その一つは課題本を選択である。国語科授業では幅広い読者層を対象として課題本を選択しなければならないが、読むことの指導ができればどんな本でもよいというものではない。学校図書館、国語科授業とも、読書会によって普段の読書生活では手に取りにくい作品に触れ、それを通して自己の価値観を深め、成長させるという思いには共通するものがあるので、学校図書館で選定した課題本を国語科授業で共有することは可能であろう。

これは、読書会での対話についても同様である。単なる読解や枝葉末節の内容の確認だけでなく、より深い作品のテーマへの追究や、作品が投げかけるメッセージへの応答と対話がなされる読書会は、学校図書館も国語科授業でも理想とするものである。ただし、読む力や読書傾向がさまざまである国語科授業において、このような対話・交流が行われることは容易ではない。国語科の読書会では、交流は各グループの生徒に進行を任せため、グループによっては上手く交流が進まないところがあった。学校図書館で行う小規模な読書会の場合は、司書がファシリテーターをすることで豊かな読書会の交流が成立していた。国語科での読書会においても、教師が一斉にファシリテーションを行ったり、生徒同士がファシリテーターとなって交流が深められるような指導をしたりすることが必要であろう。さらには、このような読書会の交流の指導を学校図書館で行うということも考えられる。例えば、学校図書館が主催する読書会に参加した生徒たちが、読書会の交流の魅力をたっぷり味わった上で国語科の読書会に臨むような流れとなれば、その生徒たちは国語科授業においても、他の生徒をリードする存在となり、相乗効果が期待できる。

学校図書館からみた国語科授業の読書会の効果は、普段本を手にとらない生徒が、もれなく、一冊の本を読み切る経験をさせることができたということである。授業は良い意味での強制力がある。生徒の興味関心から課題本を選択することは大切なことではあるが、それだけでなく、今後は、これまでに生徒があまり手を伸ばさなかった本、出会うことができなかつた本に積極的に触れていく機会として、国語科授業の読書会を位置づけることができるだろう。

国語科からみた学校図書館の読書会の効果は、読書好きな生徒が、めいっぱい好きな本について語り合う機会を提供しているということである。このような文化的な活動は、中学校ではなかなか取り組むことがない貴重な場である。今後は本好きな生徒を対象とするだけでなく、読書が苦手な生徒に対しても、幅広い層をターゲットとして読書会を開き、読書を通して語り合うことが身近なものとなっていくことを期待したい。また、学校図書館においても、各自で本を読んで読書会に参加することだけでなく、本を読むプロセスそのものを取り上げるワークショップ（例えば「読書へのアニマシオン」<sup>14</sup>など）を、学校図書館が行うのはどうだろうか。

このように、学校図書館、国語科授業とも、読書によって内面の成長を促し、自立した読書人を育

てるといふ理念には共通するものがあるので、両者の役割分担を意識するとともに、相互に連携、相乗りして、相乗的に効果が上げられるように協働していきたい。

### 3 明らかにされていない課題

本稿の研究上の課題として、まず上げられる点として、読書会そのものが、学習者の読書生活にどのような影響を与えたかという問題がある。読書会の取り組みを終えた後で、読書量、読書傾向、本を読む能力にどのような変容がみられたか、今後検証することが必要である。

もう一つは、読書会で行われた交流で、学校図書館と国語科授業とでどのような差異がみられるかという検討が残されている。双方の読書会で、どのような会話が交わされ、どうやって読みが深まっていたか、それらには違いがなかったのかという質的な検討を今後進めていくことが課題である。

最後に、学校図書館と国語科授業とで同時期に読書会を行うことの相互作用や相乗効果の検証があげられる。どのようなタイミングで双方が読書会を行うことが適切か、どのような流れや構成で読書会を運営することが効果的かなど、カリキュラムデザインの視点で、双方の読書会を再設計することが今度の課題である。

#### 〈脚注〉

- <sup>i</sup> 大槻和夫（2001）『国語重要用語300の基礎知識』明治図書、p182「読書会」（堀泰樹）から。
- <sup>ii</sup> エリン・オリバー・キーン（2014）『理解するってどういうこと』（新曜社）、吉田新一郎（2010）『「読む力」はこうしてつける』（新評論）、興水実（1975）『興水実独立講座／国語科教育学大系 第10巻 国語科文学指導・読書指導』（明治図書）
- <sup>iii</sup> 堀哲夫（2013）『教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価 OPPA』東洋館出版社
- <sup>iv</sup> スペインで実践されている読書指導の手法。マリア・モンセラット・サルト（2001）『読書へのアニメーション—75の作戦』柏書房参照